

SONRISA

そんりさ

vol. 164



グアテマラ・帰還難民の21年

グアテマラ太平洋岸ルピタ農園のマリア・トランジトの家の庭には、野菜や果物のほか、15種類の薬草が植わっている

- | | | |
|----|-------------------------------|-------------|
| 02 | グアテマラ・帰還難民のムラの20年 | ……藤井 満 |
| 07 | メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2017～ベラクルス（その3） | ……山本 昭代 |
| 10 | グアテマラ視察報告 | ……新川志保子 |
| 12 | ニカラグア・リオココ、ワスパンで初の先住民女性市長誕生 | ……新川志保子 |
| 15 | ホンジュラスの不正に対する米国の支援 | ……ラウラ・カールソン |
| 17 | ラ米百景 アレハンドロ・ホドロフスキーの記憶 | ……伊高 浩昭 |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み | ……小林 致広 |

2018年4月14日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

グアテマラでは1980年代初頭、軍のジェノサイド作戦で20万人が犠牲になり、100万人を超える難民・国内避難民が発生した。国外で10年あまり暮らした難民は、1993年から、まだ内戦がつづく祖国に集団帰還しだした。バラバラに帰国したらまた軍に殺されるしかない。団結して新しいムラをつくり、組織で対抗する道を選んだ。あれから20余年、二つの帰還難民のムラを訪問した。

(1) チャクラ農園

メキシコには国連登録の難民だけで約6万人を数えた。私は集団帰還の第1陣2,500人を1993年に国境で出迎え、1年後には帰還直後のグループによるムラづくりの現場に立ち会った。それがメキシコ国境に近いウェウエテナンゴ県ネントン市のチャクラ農園だった。

1994年1月、南北米大陸を縦断するパンアメリカンハイウェイから東に折れると、自動小銃を手にした軍や自警団の検問が相次いだ。ネントンというまちを出ると、広大な牧草地が広がり、その柵には「URNG」(グアテマラ民族革命連合)の旗が翻っていた。ネントンから2時間で、約200家族の難民が帰国したばかりの「チャクラ農園」に着いた。1880年に建てられたという白い洋館の周囲に青いビニールシートやトタンの小屋が並んでいた。

洋館に荷物をおろし、小屋を訪ねてまわった。難民たちはマヤ民族だが、全員が洋服だ。50歳前後のロサおばさんが1人だけ、あちこちほつれたコルテという巻きスカートを持っていた。「メキシコに逃げるときにすべて置いてきたからこれしか残ってない。もう洋服に慣れちゃったよ」

ロサはリモナルという国境近くの村の出身だ。1980年頃から軍が出没しはじめ、夜は山で寝ていた。1982年1月5日夕方、100人ほど



1994年、唯一残ったコルテを身につけるロサ



2017年、23年後のロサ

の兵士が乱入し、教会で11人、路上で5人を殺害した。逃げる途中、コルテを着たまま川を渡ろうとしたが女性が溺れて亡くなった。「悲しい歴史ばかり。この人はみんなこんな思いをしてるんだよ」話を聞いた10人は、いずれも悲惨な虐殺の生き証人だった。だから彼らは、5キロ離れたラスパルマス村にある軍の基地が、一番の不安だと口をそろえた。

ふつうのムラに

あれから23年、2017年5月に同じ道をたどった。検問はひとつもない。ニワトリや牛が道を跳ねまわっていたネントンは、にぎやかなまちになっている。ゲリラの旗があった広大な草原はそのままだが、道は舗装された。寒村だった国境のグラシアスアディオスという集落は、物流の拠点として100軒以上の店が密集している。戦争が終わり、市場経済の波がここまで押し寄せたのだ。

「ここがチャクラだよ」と言われてバスを降りると、100軒近くの家がならぶ普通の集落だった。エドガル・ディアスという40歳の男がバイクで迎えてくれた。集落の家々は帰還民が自らブロックを積んで1995年に建設した。出身の村ごとに5地区にわけ、それぞれ45軒ずつ建てたという。

集落の奥からさらに1キロほど山に入ると、記憶にある白い洋館が丘の上にあった。農場の中心だった洋館周辺より、交通の便のよい街道沿いの森を開いて集落にしたという。洋館は宿泊施設になっている。エドガルはその支配人だ。屋内には十数基のランプがともる。トイレ以外はあえて電灯を設けない「ランプの宿」だ。国連職員としてメキシコで難民とともに働いていたフランス人女性の指導で、2009年12月に宿泊施設はオープンした。昨年は年間約90万円を稼ぎ出し、174世帯で構成さ



宿泊施設の支配人兼料理人のエドガル。



昔の大地主の家は宿泊施設になった

れる協同組合の稼ぎ頭になっている。夕食は、鶏肉のソテーとウリやジャガイモの炒め物をエドガルが調理した。豪華ではないが、野菜が多くてやさしい味つけた。

エドガルはリモナル村のトウモロコシとフリホールをつくる農家に生まれた。おかずはチピリンやモラといった野草が中心で、卵1個を家族7人でわけあった。肉は2、3週間に1度口にする程度だった。1981年1月5日、軍が村人16人を殺害した日、15キロ離れたメキシコ側へ逃げた。5歳だった。最初の半年は樹木の下に住み、イグアナや魚を売って生活した。その後の難民キャンプの生活は「自由で楽しかった」と言う。

1994年に帰国したが、牧草地だった土地はやせていて作物ができない。だが自分たちで建てたブロックの家に入居した際は興奮した。日干しレンガの壁に草ぶき屋根、土の床と板切れの窓の家しか住んだことがなかった。「コンクリートの床とガラス窓の明るさに感動しました」 帰国当初、軍が最大の脅威だったが、国際的な監視もあって、直接の嫌がらせはなかった。だが軍は、「ゲリラに土地をとられていいのか」と周辺の住民をそそのかし、農場の一部を占拠させた。帰還民たちに弁護士を雇うカネはない。かといって、虐殺の記憶があるから暴力で対抗しようとは思えなかった。今も不法占拠はつづいているという。エドガルの家では今、1日1人で2、3個の卵を食べている。「野草なんてウサギのエサだって、子どもは見向きもしないよ」

家庭菜園

1994年に撮影した20人ほどの写真をエドガルに見せると、半分は亡くなったり、出身の村に帰ったりしたが、5、6人は健在という。23年前、板切れの小屋で、息子とともにトルティヤを焼いていたエウセビア・モンテホは29



1994年、仮設の家で料理するエウセビア



2017年、整頓された自慢の台所とエウセビア

歳のきれいなお母さんだった。街道沿いに住むと聞き訪ねた。「エウセビアはいる？」と尋ねると、「私よ」と貫禄あるおばさん。写真を見せると「こんな写真が残ってるの？あの頃の写真は1枚もないのよ」と身を乗りだした。52歳だ。いっしょに写っていた息子(当時8歳)は、今、メキシコのカンクンで働いている。

彼女はサンタアナ・ウイスタルという約150世帯の村に育った。1980年ごろから軍が出入りし、夜間に若者の誘拐をくり返すから、夜は山で寝ていた。1981年、軍に家を焼かれて、メキシコに出国した。17歳だった。この時、村では15人が殺され、2人の少女が誘拐された。最初の7カ月は、メキシコ人の家で家事をしながら居候した。その後、難民キャンプで暮らした。「コメやフリホールの援助もあって、自分たちの住む小屋もあってうれしかった」

1994年に2人の子を抱えて帰国したときは、何もかも一から始めなければならず、途方に暮れた。牧草地だった土地はやせていて、トウモロコシもインゲンも育たない。夫は集落の家屋建設プロジェクトで働き、その後、大工仕事をした。15年間はメキシコの農園に出稼ぎに通っていた。土が少しずつ肥え、コーヒーやバナナの栽培を始めた。夫は2年前から出稼ぎをやめた。裏庭にはオレンジやホコテ、レモン、スモモ、マンゴ、パパイヤを植え、果物や野菜はほぼ自給している。「息子2人がメキシコで働いてお金を送ってくれるし、畑で果物や野菜ができるから穏やかに暮らせているよ」

格差

1995年に家屋をいっせいに建設したとき、どの家もブロックづくりで規模も形も同じだった。ところが今、2階建てや3階建ての家もあり、大型の四輪駆動車を複数所有する人もいる。「ノルテ(北)で働いた人の家は大きいんだよ」。北米に出稼ぎをした人としなかった



1994年、新しい共同体のリーダー選挙で投票するアラン



2017年、1995年に建てた家に住むアランと妻

人との格差が広がっている。

カウボーイハットをかぶったアラン・ベニート (70) は、サンアントニオ・ウイスタルという国境近くの村の出身だが、マヤ民族ではなく、スペイン語を母語とするメスティソだ。軍の暴力から逃れるため1981年1月に国境を越えた。その直後、市場に薬を買いに行った妻の兄は、「ゲリラに薬を渡すためだ」と疑われ、軍に殺害された。

帰国後は協同組合で16年間、酪農担当をしてきた。今はその仕事をやめ、自分の畑でトウモロコシやインゲン豆をつくり、裏庭ではパイヤやマンゴを育てている。「現金収入が少ないから、体調を崩しても病院に行かず市販薬を飲むだけ。出稼ぎをしてないから家も古いまま。でも昔に比べたらトランキーロ (平穏) なもんだ」。最近再婚した28歳年下の女性と暮らしている。どの家の裏にも、200坪以上の菜園がある。それが、格差の広がるムラのなかでも「トランキーロ」を支えているようだ。

伝統作物復活

ヘスス・カンポセコ (53) は、23年前、洋館の目の前の大きな木の下で、子どもたちとくつろいでいた。その写真を見せると、ひげぶらの男グレゴリオ (36) が、「これ、おれだよ」と12・3歳の男の子を指さした。ヘススお婆さんはエドガルと同じリモナル生まれ。軍の誘拐を怖れて夜は山で寝ていた。山は蚊が多くて、子どもたちはいつも泣いていた。エドガルと同時期にメキシコに逃げた。

難民キャンプで結成された女性団体ママ・マキンに参加し、自給のための有機農業やさまざまな薬草の栽培を覚えた。いま裏庭で自給用の畑をつくり、野菜や果物のほかに60種類の薬草も育て、ウサギやアヒルも飼っている。「これはブレードだよ」。1メートルほどの高さの草を指さした。アマランサスは宗教



1994年、椅子の女性がヘスス、2017年ヘスス(左)とグレゴリオ(右)とその娘



儀礼に使われたが、侵攻したスペイン人は邪教の象徴としてその栽培を禁じた。以来、アマランサスの名は忘れられ、若葉を指す種子は活用されず、貧乏人の食べる雑草とされてきた。一度は忘れ去られたアマランサスは、1970年代に入って必須アミノ酸が豊富であることがわかり、アメリカ科学アカデミーで将来有望な作物としてとりあげられた。スペースシャトルの宇宙食にも採用された。

グアテマラではアマランサスの名はいまだに知られていないが、ヘススお婆さんは4年前に女性団体の活動でアマランサスを教わり、種子を砕いてアトルという飲料にししたり、トルティーヤに混ぜて食べている。

グアテマラの農村では、北米帰りの人々の影響で、フライドポテトやスパゲティなどのインスタント食品が広まっている。伝統的な牛の骨でだしを取るスープや、野草料理はあまり作られなくなってきた。「ウサギじゃあるまいし、草なんていやだ」という若者も増えている。わずかな現金をジャンクフードで浪費することが、貧困から抜け出せない一因になっているという。

ヘススお婆さんはその流れに抗するように伝統の知恵を学び、野菜や果物、薬草を活用してきた。「ここは私たちの土地だし、家も木も自分のもの。野菜や果物もいっぱいできる。私にとっては天国だよ」息子のグレゴリオは米国で7年働いたが帰国し、今は大学で農業技術を学びながら野菜や果物を栽培している。「僕も野菜は大好き。この子にも野菜をたっぷり食べさせるよ」と2歳の娘を抱いて語った。

(2) マンゴの里 ルピタ農園

グアテマラの主な都市は標高1000メートルを超える高地にあるから涼しくて過ごしやすい。そんな高地から南の太平洋に向けて路線バスで2時間も走ると、広大な平地がつづき、エアコンのない車内は一気に暑くなる。サトウキビ農園と製糖工場、アブラヤシ、バナナのプランテーション (大農場) が広がり、緑のバナナを満載したトラックが行き交っている。

土を豊かに

青い袋をかぶせられたバナナを横目に砂利道をたどっていくと、紫色のマンゴが鈴なりに

なっている果樹園があった。さらに5分、木々の合間に家々が点在する集落が帰還難民のつくる「グアダルーペ共同体」だった。メキシコに逃げていた難民131家族が、661ヘクタールの「ルピタ農園」を購入、1995年から1996年にかけて入植した。現在は約千人が暮らしている。

かつて太平洋岸は綿花地帯だった。ノーベル平和賞を受賞したリゴベルタ・メンチュウは幼いころ、高原のムラから太平洋岸の綿花農園に出稼ぎに来ていた。農薬による中毒で死亡する人も多かった。1970年代に入って綿花ブームが去ると、米国に牛肉を供給するための牧草地になった。牛に踏み固められた農園の土地はやせ、樹木はほとんど生えていなかった。

「私たちが1995年に来たころは日陰さえない緑の砂漠でした」。難民時代に結成された女性組織マドレ・ティエラ（母なる大地）の代表ラケル・バスケス（44歳）は語る。ラケルはチキムラ県カモタンで生まれた。大工だった父ドミンゴ（75歳）は1976年、60家族で協同組合を結成して、ティカル遺跡に近いカリブ海岸のペテン地方の開拓に参加した。ジャングルに囲まれた辺境だが、自分の土地でトウモロコシやインゲン豆をつくり、牛や豚を飼い、大工時代よりも豊かな生活だった。だが1981年ごろから軍が出没しはじめる。「協同組合はゲリラの仲間だ」と決めつけ、食料を徴発した。軍に同郷の男がいて、「早く逃げないと、次は殺されるぞ」と知らせてくれた。一緒に逃げた17家族が国境の川をメキシコ側に渡り終えてふりかえると、対岸に2000人ほどの兵士が到着し、「何もしないから帰ってこい」と叫びながら銃を構えていた。

14年の難民生活を終え、1995年にたどり着いたルピタ農園は牧草地で、たきぎにする木もなかった。帰還民のリーダーだったラケルの父ドミンゴが中心となって、2万5000本の木を植えた。土を柔らかくする効果がある豆をまいた。枯葉は燃やすのをやめて土に還元するように

した。20年を経て、多くの木々が育った。

直径20センチの巨樹の下でバイクの修理をしている若者に「これは何の木？」と尋ねると「アルメンドラ」という。苗木から4年間で大木に育ったという。「果実はちょっと苦みがあるけど甘くておいしい。つぶして煎じて飲めば糖尿病に効く。種子は砕いてパンに入れるとおいしい」そんなすばらしい樹木があるのか、と感心していたら「スーパーにも売ってるよ」と言う。え？辞書を引くとアーモンドだった。

さらに、「土を豊かにする」と、農業技術者が彼らに教えたのがマンゴとレモンだった。マンゴは幼木の時は水まきが必要だが、成木になれば放置しておける。大量の葉を落とし、それが肥料になる。2000年ごろから、大半の世帯が加入する協同組合が約60ヘクタールのマンゴ園を開いた。以前は、現金収入源はゴマしかなかったが、今は、メロンほどの大きさに育つ品種「マンゴトミ」が稼ぎ頭に育ち、ルピタ農園は近隣で「マンゴの里」と呼ばれている。

私が訪ねた5月はちょうど収穫期で、紫の実がたわわに実っていた。マンゴトミは1個で腹いっぱいになる。フーゴと呼ばれる品種は果汁が豊富だ。アマティーヨという品種は筋が多いけど味が濃い。マンゴ園の隣の土地に植えられているパプリカに似た黄色い果物は「マラニョン」という。やわらかい実にかぶりつくと、果汁が豊富で飛び散るほど。ドリアンに似た独特の香りがある。ソラマメのような形の種子部分も食べられるそうだ。調べたらカシューナッツで、果肉部分は英語でカシューアップルと呼ばれるらしい。

種子の保存

マリア・トランジト（57歳）はメキシコ国境に近いウェウエテナンゴ県クイルコで生まれた。父はサトウキビ農園の労働者で、兄弟姉妹が11人もいたので、12歳でメキシコのコーヒー農園に出稼ぎして、14歳になると家政婦をしていた。23歳で結婚し、最初の子が妊娠5カ月のとき、当時住んでいたまちに軍隊が出没し、14・5歳の少年をトラックで強制的に徴兵しだした。夫のトマスは軍を怖れて夜は山で寝ていた。土鍋や食器が家にあるだけで、「ゲリラにふるまうんだろ」と難詰された。「トマスはゲリラだ」と兵士が語っていたと聞いて、1982年にメキシ



この20年で周辺はバナナなどの大農園に覆われてしまった

4年間で大木に育ったアーモンドの木

コに逃げることにした。トマスの姪は翌年「ゲリラ」とされて軍に連行され、300人の兵士に暴行されて殺された。

メキシコの難民キャンプでは、教会からヒヨコが配られ、ニワトリになるまで育てて売った。インゲン豆やコメ、トウモロコシも援助してくれた。1992年にキャンプ内に、野菜栽培などを学ぶ女性グループが結成された。牛馬の糞を拾って砕き、種まき時の肥料に活用した。パン焼き窯もこしらえた。このグループが後に難民キャンプの女性たちが参加するマドレ・ティエラ（母なる大地）という組織に育った。

帰国後、2000年ごろからは、種子の保全にも取り組んでいる。たとえば、トウモロコシは市場で高く売れる白い品種が主流になり、黒や黄色は栽培されなくなっていた。だが実は、黒い品種の方が栄養は豊富だ。全国の農民と交流するなかで、先祖伝来の種子の大切さに気づいたという。さらに、各地の農民からさまざまな種子を入手した。

マリアの家の庭には、マンゴやマラニオン、バナナ、アーモンドなどの果樹とともに、ヨモギに似たキステ、アモールセコ、エパソテ（アリタソウ）、モリンガ（ワサビノキ）など15種類の薬草が植わっている。共同体全体で計62種類の薬草を育てているという。庭にはメキシコ人から譲ってもらった果樹グアイヤがあった。梅の実ほどの果実の堅い殻をはずすと、種子のまわりに厚さ2ミリほどの半透明の果肉がある。ライムに似た酸味と、ライチのような食感だ。ムクロジ科の植物で、エルサルバドルなどではマモンと呼ばれている。8年前に植えたが6年間は一粒も実らなかった。「切り倒して、たきぎにしちゃうよ」とマリアが毒づいたら、昨年はじめて実をつけた。「おかげで今年は大豊作。植物にも脅しがきいたんだね」。マリアはうれしそうに半透明の実にかぶりついた。

水問題

1996年に131家族の難民がルピタ農園に入植したとき、80年代の戦争を逃れてきた国内避難民の共同体が点在する以外は、周囲には広大な牧草地と未利用の森しかなかった。共同体に樹木を植え、畑を耕し、10月から4月までつづく乾期は井戸水を汲み上げて野菜を育ててきた。ところが、たきぎを取っていた森や周囲の牧



マンゴ集荷



メロンの大きさのマンゴトミ



マラニオンは果汁が豊富
種子はカシューナッツ



グアイヤの半透明の果実
はライチのような食感だ

草地はこの10年余りで、サトウキビやアブラヤシ、パイナップル、バナナのプランテーションに変貌した。それとともに年々雨量が減ってきた。20年前は4月末から雨が降りだしたが、今は5月半ばになっても降らない。ここ数年は深さ5、6メートルの井戸が次々に涸れ、10メートル以上掘らなければならなくなった。海水が混じる井戸も増えてきた。

「プランテーションを開くため森を伐採したから雨が減り、大農場は深さ100メートルもの井戸から水を汲み上げスプリンクラーで散水するから、地下水も枯渇してきたんです」とマリア。マドレ・ティエラ代表ラケルは、「水がないから、乾期は家庭菜園もできなくなってきた。日々の生活に追われて環境問題まで見ようとしない人が多いけど、マドレ・ティエラでは自然保護区の設定を求める運動も始めました」。

彼女たちの共同体でも、バナナやパイナップルのプランテーションで働く若者が増えてきた。彼らはバイクで農場に通勤する。そのバイクは農場で購入する。「5年間でローンの返済が終わるころにはバイクが壊れるんです」とマドレ・ティエラの女性たち。バナナ農場などの労働者には、農薬のせい、がん患者が多いとも指摘されている。

共同体から6キロ離れたボリビアという集落は、20年前は小さなムラだった。しかし、今はプランテーションの労働者が住みつき、週末は飲み屋やディスコが不夜城のようににぎわう。売春も横行し、性病の流行が問題になっているという。

メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2017 ベラクルス（その3）

山本 昭代

2017年8・9月のメキシコ・ベラクルス州への旅の話3回目。ベラクルス市郊外の住宅地「サンタフェの丘」の外れで、国内でも最大規模の秘密墓地が発見され、行方不明者を探す家族の会「ソレシート」が発掘を行っている。地元の犯罪組織が、何年にもわたって何百人もの犠牲者を運び込み埋めてきた場所である。

犯罪組織同士が縄張り争いを繰り広げ、資金稼ぎのために恐喝や誘拐、強盗をし、さらにメンバーをリクルートするために若者を拉致し、行方不明にする。司法当局も犯罪組織から買収され、あるいは脅され、しばしば組織の下働きと化しているのだ。

それまで平穏に暮らしていた家族のひとりがある日突然、出かけたきり帰ってこない。いくら探しても見つからない。警察も動いてくれない。それまで他人事としか思っていなかった事態に自分が陥ったとき、人はどうなってしまうのだろうか。

行方不明事件が人生を変えた

ソレシートを中心メンバーのひとり、ロサリア・カストロ・コスは、「事件以来、生活は180度変わってしまった。心理的にも、もう仕事を続けられなくなってしまった。パーティーにも行かなくなった。にぎやかなところは耐えられない」と苦しげに語った。

ロサリアは歯科医師で、ベラクルス市から車で4時間ほどの街で医院を開業していた。息子のロベルトは高校教師で、ベラクルス市に家を買って、恋人と暮らし始めたところだった。2011年のクリスマスイブの日、当時38歳のロベルトは、休暇を母の家で過ごすため、恋人とともに車で実家に向かっていて、彼女を母に紹介すると言っていた。しかし予定の時刻になっても息子たちは到着しない。心配になったロサリアは、恋人の実家などあちこちに電話をかけ、翌日から警察や病院などを回って探し始めた。警察に届けたが、なんの助けにもならなかった。

ベラクルス市からの街道沿いに、自分で行



息子との写真を持つロサリア

方不明の2人の写真と電話番号を入れた張り紙をした。するとしばらくして、その2人と思しい人たちが車から無理やり降ろされているのを目撃した、という匿名の電話があった。しかし電話してきた人はその後番号を変えてしまったらしく、連絡がつかなくなってしまった。自動車強盗だったかもしれない、と廃車置き場などを探して回った。すると武装した男たちが現れ、余計なことをしていると殺すぞと脅された。

その後、ロシアと出会ってソレシートの会を立ち上げた。ベラクルス市やメキシコシティなどでデモを行ったり、ほかの行方不明者家族の支援を行ったりしている。メキシコでは、行方不明者として届けられていた人が実際は刑務所にいた、というケースもあるので、会のメンバーらとともに各地の刑務所を巡ったりもしている。

あるクリスマスの日、ロサリアたちはベラクルス市の中央広場にクリスマスツリーを立て、そこに行方不明者の写真を飾りつけた。街をゆく人々は、その数の多さに驚いていたという。身近にこれほど多くの犠牲者が出ているにもかかわらず、ほとんど報道もされず、あるいは一部の犯罪者の間の争いだと矮小化され、多くの人々は他人事と思っているのだ。

コーヒーの産地コルドバ

ベラクルス州で殺人や行方不明者が多発しているのは、中部沿岸のベラクルス市周辺だけではない。南部の農業地帯や内陸部の街でも、近年、状況は悪化している。ベラクルス市から車で2時間ほどの内陸の街、コルドバ市

は、州内で 3 番目に人口が多い行政区。コーヒーの特産地で、中心街はコロニアル建築の建物が美しい、落ち着いた雰囲気のある街だが、2016 年の殺人件数は州内最多を記録した。麻薬カルテル同士の戦場となっているのだ。

この街で活動しているソレシートのメンバー、マルセラを紹介してもらい、会いに行った。コルドバにも 40 人近いメンバーがいる。

マルセラの息子、ドリアンは、2012 年 11 月、当時 31 歳のとき、友人とガソリンスタンドにいたところ、何者かに連行されて行き、それきりになってしまった。白昼、目撃者もいる中でのことだった。警察に訴えたが、動いてくれなかった。その後、身代金請求の電話が来た。マルセラは交渉し、工面して現金を用意し、指示された場所に持参した。すると、息子の身柄は、隣のプエブラ州の辺鄙な村で引き渡すと連絡が来た。指定されたのはわびしい荒野のような場所だった。ずっと待っていたが、ドリアンは現れなかった。家族や友人らと交代で 1 週間もその場所や周辺を探し回り、地元の人にもたずねて回ったが、見つからなかった。

ドリアンは母親と一緒に不動産業を営み、犯罪などとは縁のない暮らしだった。一緒にいた友人の方に何かあったのかもしれない、という。この事件以来、マルセラの生活は一変した。仕事も辞めて、息子の捜索と、ほかの行方不明被害者の家族の支援のために自分の時間と情熱のすべてを注ぐようになった。自分がひとりで探してずっと辛い思いをしてきたので、同じ思いの人たちの力に少しでもなりたい、という思いからだった。

マルセラの活動が新聞などで出るようになると、脅しもあったが不思議なことも起きるようになった。ある日、マルセラがほかの被害者家族とレストランで話をしていると、通りかかった見知らぬ男が、紙ナプキンになにか手書きしたものをテーブルに置いていった。秘密基地の場所の地図らしかった。警察の協力で発掘捜査を行ったが、結局その場所からは何も出なかった。それでもマルセラは、きちんと捜索すれば発見できるのではないかと疑っている。

その後、SNS を通じて、再び匿名の人物から地図が届いた。別の場所のものだった。さらに別の日、自宅の玄関の下に、地図を書いた紙



コルドバ市で活動するマルセラ

が置かれているのを発見した。警察と一緒に現場に行ったところ、いずれの場所も、かなりの数の遺体が隠されている可能性の高い秘密墓地だとわかった。そのなかには 2 か所の古井戸もあり、中に 20 体くらい投棄されている可能性があるという。井戸は水で満たされているので、ダイバーの協力を求めなければならず、まだ捜索作業は始まっていない。いずれにしても検視官の手が足りず、サンタフェの丘の発掘作業がひと段落しないことには、こちらの発掘にはかかれぬというのだ。



コルドバで遺体が隠されているとみられる古井戸を調べる人々(マルセラのスマホ写真を複写)。

警察官による強制連行

コルドバで会ったもうひとりの被害者家族の女性、ロサ・マリアの息子のケースは、警察と組織犯罪の癒着を示す典型的な例だろう。ロサの息子リカルドは、2013 年 2 月、たまたま仕事で訪れたアトヤック行政区の町で、ほかの地元の若者たち 20 人以上と一緒に、覆面の警察官の集団に連行され、消息不明になった。拉致に用いられたパトカーは約 10 台で、ナンバープレートは隠されていたという。息子は当時 25 歳で、妻と当時 2 歳の子どもと暮らし、コルドバでささやかな洋品店を営んでいた。



警察に息子を拉致されたロサ・マリア

アトヤックは、ベラクルス市とコルド市の間くらいに位置し、地元には砂糖の製糖工場があるだけで、仕事のない若者の中にセタスのために働くものが多いという。一緒に拉致されていったのは全員男性で、最年長は60歳、最年少は14歳と16歳だった。これほどの規模の集団拉致行方不明事件にもかかわらず、ゲレロ州のアヨツィナパ教員養成大学43人学生行方不明事件の前だったため、報道もあまりされなかった。

被害者家族の中には怯えて警察に訴えようとしないう人も少なくなかったが、家族の会が結成され、情報交換や捜索活動を行ってきた。その後、拉致現場から生き延びた人が証人となり、実行犯の地元警察署長が逮捕された。連邦警察が人員とパトカーを集団拉致のために貸し出したこともわかった。裁判はこれからなので、真相の解明はまだ待たなければならない。

地元では、拉致された人たちは、どこかで犯罪組織のために働かされているのかもしれない、とうわさされている。連れて行かれたのはほとんどが健康な若者ばかりで、年配でも自動車の整備工など、専門技能を持った人が選ばれていたというのだ。この地域では若い女性が行方不明になる事件もしばしば起きている。それもきれいな女性ばかりが狙われるという。犯罪組織の兵士の性奴隷にするために拉致して行っているのではないか。

リカルドはまもなく29歳になる。どこかで生き延びてほしい。ロサの父親は孫のリカルドを溺愛していたので、あの子が帰ってくるまでは死ねない、とずっといていたが、1月に亡くなった。さらにロサの夫も、持病の糖尿病が悪化して4月に他界した。相次ぐ悲しみに、ロサは不眠に悩み、睡眠薬に頼ること

もあるという。「仕事が忙しいので、それに集中している。それにリカルドの娘と、もうひとりの孫がどちらも5歳で、かわいい盛り。一緒に住んでいるので、その2人から元気ももらっている」と、ロサはかろうじて笑顔を見せてくれた。

ロサに限らず、行方不明犠牲者の家族のなかには、愛する家族の消息を案じて不眠に悩む人も少なくない。犠牲者支援法が成立し、犯罪被害者の家族の精神的苦痛に対応するために専門的なカウンセリングを受けられる制度などもあるが、カウンセリングに行く時間がないなど、恩恵を受けられる人ばかりではない。

さらに警察に届け、独自に捜索活動を行ったことで、残った家族も同じ目にあわず、などと犯人から脅され、州外に逃げ出さなければならなくなる人もいる。犯罪被害者の家族は、知人や友人らなどからさえ、巻き添えになることを恐れて付き合いを絶たれたり、心無い言葉をかけられたりすることもある。被害に遭った理由がわからないだけに、「被害者の側に何か落ち度があったに違いない」などと一方的に決めつけられがちなのだ。実際には誰が犠牲者になるかわからない暴力的な状況の中、被害者を加害者化し、「自分には関係ない」と心理的なバリアを作ることで安心しようとしているのではないだろうか。

仮に、犯罪組織と何かしらの関係があったとしても、強制失踪させられ、秘密墓地で亡骸となって見つかる人々は、みな犠牲者である。なにか法に反することがあったのであれば、それは法に基づいて裁かれるべきことである。基本的人権として保障された自由を奪われ、さらに命を奪われて、人としての尊厳を奪われたまま、ビニール袋詰めにして土中に埋められるなどしてよいはずはまったくない。

その背景にあるのは、犯罪者が処罰されない「不処罰」の現状と公安当局の汚職である。メキシコはこれまで司法システムや警察組織の改革を何度も繰り返してきたが、不処罰と汚職は減らず、むしろ現政権では増えてさえいる。犯罪者が国家を凌駕しているのが現状である。このような人道に反する状況を改革していくよう政府に圧力をかけていくことは、国際社会の義務ではないだろうか。

今年3月13日より19日まで新川志保子、石川智子がグアテマラ視察を行い、レコムが支援している三つのプロジェクトを訪問しました。以下にその報告をいたします。

(1) 障害者のための組織 ADISA

—ソロラ県サンティアゴ・アティトラーン—

20年前に設立されたADISAは、障害を持った子どもたちが必要なケアを受け、社会の中で健常者と一緒に生活できるように支援する活動をしている。レコムが仲介して、昨年からカトリック教会大阪司教区のシナピスこども基金より年間100万円の助成を受けている。

この助成は0歳から6歳までの子どものセラピーと、その家族へのアテンドに使われている。障害をもって生まれた子どもは、6歳までに適切なセラピーを受けられるかでその後の成長が大きく変わるのだという。そのため、どれだけ早く見つけて対処するかが極めて重要となる。

当初は60人の子どもが対象だったが、その後、支援の要請が増えて、現在はその倍以上の子どもを見ている。一人一人の状態に合わせて理学療法と言語セラピーなどを組み合わせたケアを行なっている。

今回の訪問では新しく導入されていたセラピーが二つあった。一つは、子どもが距離、空間、上下の感覚などを覚えやすいように工夫をしたサイコモーター（精神運動）。もう一つはウォーター・セラピー、こちらは町にあるリゾートホテルの好意で、月に一度プールを使わせてもらえることになって実現したものだ。これを始めて、子どもたちがとてもくつろいで体の動きもよくなっているのだという。



家庭訪問でのセラピー



ADISA オフィスでスタッフから話を聞く

また、メンタル・ヘルスのプログラムも新設されていた。ほかに、総合的な家族へのケア、首都の病院での検査や治療への同行、貧しい家族を助けるための貯蓄や小規模融資といったことも行われている。家族、特に母親へのサポートが非常に重要である。多くの場合、子どもの障害のことで自分を責める、あるいは親戚から責められることも多い。そのような親を孤立させないために、親たちが障害について知り、交流する機会も作っている。

(2) 子どものための土曜学級

—チマルテナンゴ県ポアキルー—

今年度の土曜学級【そんりさ159号】は、アシエンダ・マリアという新しい村で行われている。受け入れの子どもは30人、女の子と男の子が同数だ。5歳から10歳までいて、プレスクールから小学校1年と2年のカリキュラムを教える。教師はクレメンティナ・メヒアさん。給食や会場の準備などの世話は、グアダルーペ協会のメンバーであるアウラ・マリナさんだ。

アシエンダ・マリア村はポアキルの町から車で3~40分ほどのところにあり、交通の便は悪い。これまでの土曜学級としては最も遠隔地にあり、それだけ村の人々の暮らしも厳しいということだ。村に小学校はあるが、教材・文房具は親が負担しなければならない。そのため子どもをやれない家庭も多いそうだ。

グアテマラの新学期は1月で、土曜学級も1月20日から始まった。昨年11月に受け入れる子どもたちを決め、その親とも集まりを



土曜学級の子どもたち

持ったそうだ。会場は村の教会の集会場を借りて、行なっている。ほとんど毎回、受け入れている子ども以外に一人か二人の子どもがやってくるのだという。返すのもかわいそうなので、そのままクラスに参加させるそうだ。

私たちが訪問した日も集まっていた子どもは31人だった。子どもたちは、大きな声で元気よく挨拶してくれ、ダンスと歌で歓迎会をしてくれた。

そして、給食。やはり給食は子どもたちにとって最大の楽しみだ。朝やって来るなり「いっごはんなの」と聞く子どももいるのだという。前日にアウラ・マリーナさんがポアキルまで材料の買い出しに行き、翌日お母さんたちが交代で料理する。



土曜学級の給食

(3) 戦時下性暴力—セプルサルコ裁判の勝利判決より2年

内戦下で軍による性暴力を受けたイサバル県セプルサルコ村の女性たちが起こした裁判は2016年2月に勝利判決を勝ち取った。それから2年が過ぎたが【そんりさ156・160号】、グアテマラ国家に対して命じられた補償に関しては、昨年に移動クリニックができた以外にも、少しずつ進んでいる。

クリニックは現在医師1名と看護師2名(男女一人ずつ)が常駐しており、近隣の村を回って回診する。ほかでは、セプルサルコ村とその近隣の村の人々を組織して、判決の精神をどのように現在の生活に反映させるかを検討する。教育、保健、土地、文化のテーブルに分かれて話し合いを行う。

判決文をグアテマラ国内24のマヤ言語に翻訳する作業も進んでおり、教育省によって現在3言語(ケクチ、カクチケル、キチュ)の訳が終わっている。またこのテーマでドキュメンタリー・ビデオの制作も準備中とのことだ。文化省からは文化プロモーターを2名出してもらい、セプルサルコ村とエストル市で世代間の文化交流も行なっている。近隣の45コミュニティで社会経済的な状況の調査も行われた。農業省からは家庭菜園を行うための育苗などの支援を受けることになった。

肝心の土地問題はまだ解決していないが、現在の村の土地の「所有者」から国が買い上げるための交渉は始まっている。これらは女性弁護士組織MTMがコーディネーターとなり、補償の実施に関わる各省庁間を調整しながら進めるための努力が続けられている。

国家による補償以外にも、ハロク・ウの女性14人を支援するためにいろいろな試みが行われている。彼女たちが現金収入を得られるように織物や編み物をして作ったバッグやカゴなどの製品を販売するのもその一つだ。昨年は大雨で水害が起こり、作物が収穫できなかったが、それを補うために国連農業食料機関やユニセフと交渉して基本食物を寄付してもらった。また、「人権ツーリズム」を起こして、グアテマラ内外からの訪問者に内戦の歴史と戦時下性暴力について知ってもらう企画もたてられている。

リオココ、ワスパンで初の先住民女性市長誕生

新川志保子

前号、ワスパンで開催されたリオココ先住民女性フォーラムについてお伝えした。この時のフォーラムは、例年にも増して盛り上がっていた。それは並行して、地方選挙のキャンペーンも行われていたからだった。

ワスパンの市長には、フォーラムの主催団体であるワンキ・タグニの代表であるローズ・カニングムさんが立候補していたのだ。カニングムさんは政府与党サンディニスタ党から請われて出馬していた。サンディニスタ党は、リオココ一帯で住民に対して誰を市長にしたいかというアンケートをとったという。多くの住民が、地域で先住民女性のための活動を長年続けているカニングムさんの名前を挙げたのだという。

リオココとコントラ内戦

もともと、リオココ一帯はミスキートの政治団体であるヤタマの影響力が強いところだった。これについては、1980年代のニカラグア内戦について知る必要がある。1979年、サンディニスタ民族解放戦線がソモサ独裁政権を倒し革命政権を樹立すると、これを潰そうとする米国などの介入によって、1980年より反革命（コントラ）運動が起こった。これがその後10年間も続くコントラ内戦である。

リオココ一帯はこのコントラ内戦の激戦地であり、ミスキート民族が敵と味方に分かれて殺し合ったという歴史がある。コントラ側のミスキート人のグループがヤタマであった。

言葉や文化・習慣が違うミスキートの人々への無知と無理解から、サンディニスタ革命政権も多くの過ちを犯したのである。その結果、たくさんの人々を反革命側に追いやったという側面もある。「安全のため」にリオココ一帯のすべてのコミュニティの人々を内陸部に強制的に疎開させたことは、深い傷として今でも人々の記憶に刻まれている。このような経緯から、リオココは、現在でもサンディニスタに対する不信感・反感が強いところである。

これまでの選挙では、カリブ海北部自治地域 RACCN の首都であるビルウィを始め、主な自治体の首長はヤタマが取っていた。この地域は、中央から見ると人口も少なく政治経済的にも影響のないところなので、サンディニスタ政府はヤタマを野放しにしてきたところがある。

しかし、ここ数年、土地問題（注1）をめぐって、ヤタマによる暴力が眼に余るようになってきた。そこで、今回の選挙では、ぜひサンディニスタ党から市長をだすべく人選を行ったようである。女性たちはこの選挙を自分たちの要求を政治に反映するまたとないチャンスと捉え、積極的に選挙キャンペーンを始めたのだ。

選挙キャンペーンの対比

予算に合わせて公共サービスやインフラ整備などの具体的な公約をかかげたカニングム候補に比べて、ヤタマの候補は公約もなく、対立候補についてのデマや中傷、サンディニスタに投票するなど脅迫するなどの行為に終始した。

都市部とコミュニティの中では、状況はかなり違っていった。都市部においてヤタマ支持者はごくわずかと言われていた。それも当然



リオココ先住民女性フォーラム最終日での行進。きたる選挙に向けてカニングムさんに投票するように呼びかける人々

で、人々は前の市長が一切仕事をしていなかったのを目の当たりにしていたからだ。

ゴミの収集も行われず、町の20%をカバーしていた上水道が部品の故障で止まってしまったままほったらかしにしていたなど、行政がまったく機能していなかったのだ。町で大きなイベントが実施できる唯一の会場はスタジアムだが、それも荒れ放題で、何のメンテナンスもしていなかった。

対照的に、そのスタジアムのすぐそばには、町には場違いなほどの豪邸がそびえている。これは前市長の個人宅である。そういうことを常日頃目に行っていることもあって、ワスパンの町の人々は、ヤタマ系の市長にうんざりしきっていた。

一方、リオココ沿いに点在するコミュニティは、人口数百人から千人程度の小さな村社会である。その村社会の力関係などで、投票動向も左右されることが多い。また、ヤタマはコミュニティで投票日直前に現金を配ったのだという。

そして11月5日の投票日を迎えた。結果は、カニンガムさんの勝利だった。最高選挙管理委員会（CSE）によると、彼女の得票数は9,033票（49.07%）、ヤタマ候補の得票は7,919票（43.02%）だった。

ワスパンのほかにも、ビルウィ、プリンサポルカなど、RACCNの主要な自治体においても、サンディニスタ側が勝利した。カニンガムさんはニカラグアで初めての先住民女性の市長となった。

ワスパン、ミスキート民族

カリブ海北部自治地域には、8つの郡（ムニシピオ）がありワスパンはその一つである。日本では「郡」という地方行政体がなく、「郡長」という呼び方も馴染まないのが、ここでは、便宜上「郡」ではなく「市」、「市長」という名称を使うことにする。ワスパン市はホンジュラスとの自然国境であるココ川（リオココ）一帯にあり、その面積は8,133平方キロメートルで、RACCNのほぼ25%を占める。

ニカラグアにおけるミスキート人の人口は120,817人（2005年の国勢調査）で、ニカラグア全人口の2.35%である。ミスキート人のほとんどは、カリブ海側（コスタ）の北部地域

であるRACCNに居住している。中でもミスキート人口の割合が圧倒的に多いのがワスパンで、人口の93%以上はミスキート人である。

ワスパン市の人口は約8万人である。また、数は少ないがもう一つの先住民族であるマヤグナの人々も、このワスパン市北西部の広大な自然保護地域であるボサワスに住んでいる。

ワスパン市の中心はワスパンの町（casco urbano）で、市庁舎や各省庁の出張所など主な行政機能はこのワスパン町にある。ワスパン市の行政区には、115の先住民コミュニティと7つのテリトリーがある。

自治の状況を複雑にしているのは、このカリブ自治地域には従来の地方自治体と並立して先住民テリトリー政府（テリトリーは複数のコミュニティで構成されている）があることだ。わずかではあるが、テリトリー政府には中央政府からの予算もついている。建前はテリトリー内の土地や資源の運用や決定をください権限を持っている。しかし、市役所とテリトリー政府が、どのようにその権限の分担をしているかなど、はっきりしない部分も多いのである。

実はワスパンの町も、一つのテリトリー（15コミュニティ）をなしている。ワンキ・アワラ・クピアとといい、3年前に成立したテリトリーである。住民に選ばれて、その長になったのがローズ・カニンガムさんである。

以来、住民集会を催して、予算とその用途を周知し、透明性を徹底した。テリトリー政府のオフィスと地域住民のための施設の建設や、環境調査や水源を守るための植林への協力、環境教育や人権教育などを行ってきた。

今回の市長選においては、カニンガムさんはワスパン町で圧倒的な支持を得たが、それは住民が彼女のこれまでの活動を評価したからである。今回の市長当選によって、カニンガムさんは市とテリトリーの責任者として活動することになる。

新市長の就任

ローズ・カニンガムさんは、ワスパンで生まれ育ったミスキート女性だ。サンディニスタ革命が起きると、革命政権に協力してワスパン地域の発展に貢献した。また、コントラとサンディニスタ政権の和平交渉が始まると、元

コントラ兵士の武装解除と帰還・社会復帰のために尽力した。

彼女は、先住民女性のリーダーとして1980年代より国際的な場でも発言を続けている。日本との関わりもあり、1995年の国連北京女性会議に参加後、来日して各地で報告会を行なった【そんりさ20号】。また、2008年にも、北海道で開催されたアイヌ民族による先住民民族フォーラムに招かれ、参加している【そんりさ114号】。

そして、今年1月24日、カニンガム新市長が就任した。だが、その門出は波乱万丈だった。まず、選挙で負けたことがわかってから、ヤタマは市庁舎を荒らした。中の机やキャビネット、書類などが持ち去られていたという。これは汚職の証拠を残さないためだったと言われている。実際、そのすぐ後でワスパンを訪問した時に、私たちが目にしたのは荒れ果てた市庁舎である。庭には、古いゴミ収集車が二台、タイヤとエンジンが抜き取られ、巨大なゴミとなって打ち捨てられていた。奥にはゴミの山もあった（注2）。

就任後、新市長がまずやったことは、町中に溢れていたゴミの収集であった。上述のようにゴミ収集車は使えないので、住民に協力を呼びかけ、トラックなどを工面して、十数トンのゴミを町の外れにあるゴミ捨場に運んだのだという。

さらに、市役所の職員に4ヶ月給料が払われていなかったということもわかった。新市長はいくつもの問題に加えて大きな借金を抱えて出発しなければならなかったのである。これについては現在中央政府からその分を負担してもらうように交渉中だということだ。

だが、ほかにも問題は山積している。近年、コミュニティからワスパンの町への人口流入が続いており、人口増加によって引き起こされる問題（水源の枯渇など）が深刻になっている。木の伐採のほかにも、森への火入れ、悪い方法での漁による川の汚染、毎年ひどくなる水害やそれによる農業への影響もある。女性への暴力や、人身売買、麻薬などの問題も深刻である。教育や保健、インフラなどコミュニティからの要望も多い。このような状況で、新市

長は、人々の変化への期待に応えるべく、中央政府とも交渉しながら、限られた資源の中でやっていくという難しいかじ取りをしていかなければならないのである。

だが、大きな希望もある。まずカニンガムさんを市長にした女性たちがこれで大きくエンパワーされたことがあげられる。有権者が選挙で政治が変えられるという実感を持ったことは大きい。カニンガムさんのリーダーシップのもと、住民参加による自治の実践は着実に進んでゆくだろう。



市長に就任したローズ・カニンガムさん。副市長と

（注1）土地問題：コスタの土地は、基本的に先住民コミュニティの共有地である。しかし、この土地に太平洋側からメスティソの人々による違法移住が増え続けている。彼らは木を伐採して牧畜や農業を行い、環境破壊が進んでいる。そのため、コミュニティの人々と不法移住者のトラブルが絶えない。ヤタマのグループが、移住者を襲って、殺害するなどの事件も増えている。

（注2）ビルウィではヤタマは市庁舎に火をつけ、それを阻止しようとした夜警が殺されるという事件も起きている。もっとも、妨害工作を行うのはヤタマだけではない。今回の地方選において、サンディニスタ党は7つの自治体を保守系野党に奪われた。しかし、政権交代時に金庫を空にし、大急ぎで自治体所有の不動産などを中央政府に移し、車両やコンピューターなどの事務機器などが行方不明になるということも起きていた。さらには、中央政府はこれら非サンディニスタ自治体に対し、予算を半分に削減したという。（「エンビオ誌」2018年1月号）

ホンジュラスの不正に対する米国の支援は民主主義に対する裏切りだ

ラウラ・カールソン 2018年1月24日

トランプ政権は私たちの鼻先で大統領選挙の乗っ取りを手助けしたばかりだ。昨年11月26日、ホンジュラスで行われた大統領選挙後の最初の公式結果は「反独裁同盟」候補者サルバドル・ナスララが、現職のファン・オルランド・エルナンデスを抑えて明らかに優勢だった。その名称が示すように、ホンジュラス国民は対抗連盟の候補者その人に投票したのではなく、中米で最も専制的で抑圧的なリーダーの憲法で禁止されている大統領再選を阻止するために投票したのだ。

エルナンデス大統領のもと、ホンジュラスは土地の所有権や環境権を守ろうとする人たちにとって世界で一番危険な国となった。2009年の軍事クーデターで右派勢力が権力を掌握してから、この中米の貧しい国は軌道を失った。いくつかの都市は世界で最も高い殺人率を示し、人口流出が急増、組織犯罪は国土を侵食し、民主制強化の前進は消え去った。2016年、世界的に有名な環境活動家でフェミニストのベルタ・カセレスが暗殺され、ホンジュラス軍の兵士や前兵士がそれに関わっていたことがわかると、世界的な抗議活動が起こった。ある専門家グループの最近の報告は、エルナンデス政権は組織的に捜査を妨害したと明かしている。

不正の筋書き

開票が57%進んだ時点で、最高選挙裁判所は、ナスララ氏が5ポイント上回り、これは覆されることはない、と発表した。しかし、その時に選管のシステムがダウンした。選挙裁判所は技術的な問題が起きたとして、30時間以上の間、情報を出さなかった。そしてシステムが復活した時、エルナンデス候補者が突然、まさかの逆転で上位になっていた。そしてそのまま僅差を維持した。国中が混乱し、信用できる情報もないまま、選挙後3週間が経った12月17日に、選挙裁判所はエルナンデスの大統領当選を宣言した。

ほとんど誰も裁判所の発表を信じていない。米州機構(OEA)の選挙監視団も、両候補者の

獲得票数の差がわずかであることと、この選挙を取り巻く不正、間違い、システムの不備のせいで、監視団がしかるべき時に勝利者が誰であるか確定できなかった、と発表した。さらに、エコノミスト誌による分析は、エルナンデスに勝利をもたらした投票パターンについての選挙裁判所の説明は「限りなく信用できない」というものだった。システムのダウンによって票の集計が中断するなどという発表は、一般的に悪い冗談でしかない。野党は、まず国際的な監視の下での全投票の再集計を行い、その後エルナンデス内閣が総辞職することを要求した。米州機構の事務総長ルイス・アルマグロも選挙のやり直しを要求した。

11月26日の投票以降、何十万人ものホンジュラス国民が投票の結果を認めることを求め、毎日通りに出て抗議活動を続けた。政府はこれに対して催涙ガスと銃弾で応えた。国家人権擁護団体(COFRADEH)の調査による目撃者の証言では、この時までには反対派のデモ参加者35人以上が殺害された。

米国の手口：初めにクーデター、次に選挙の乗っ取り

米国はホンジュラスが自らのリーダーを自分で選ぶことが許せないようだ。冷戦時、1963年の軍事クーデターを一方向的に支援し、その後20年余りにわたって軍事独裁政権を支えた。さらに2009年には国際的な抗議の声にもかかわらず、ヒラリー・クリントン国務長官はクーデター政権を権力の座に留まらせるために画策し、オバマ大統領はそれを支持した。

選挙裁判所の発表の数日後の12月21日、トランプ政権はエルナンデスに祝辞を与え、ホンジュラスの不正選挙を支える最初の政府の一つになった。米務省の声明は、ホンジュラスに対し、国内の政治的対立を是正し、緊急に必要な選挙改革を宣言するという、うわべだけの呼びかけを行うと同時に、現実の「反則」については短く言及しただけだった。しかし、政治的対立を是正するというのは、「エルナンデ

スは出ていけ」と書いたプラカードを持って通りで抗議する人々に対して、黙れ、家へ帰れ、というための口実にすぎない。大統領選挙を攪乱するという最悪の選挙妨害を積極的に支持し操作する一方で、選挙制度の改正を訴えるのは、きわめて恥知らずな偽善行為である。

ホンジュラスの民主主義を抑圧するため、米国政府はまずエルナンデスの勝利を確実にしようとした。しかし、それは予想に反して選挙では失敗した。弾圧と汚職行為に関わっていた大統領を打倒するためにホンジュラス国民が立ち上がったからだ。そして、野党の予期せぬ勝利を目前にして、次の段階では、得票数を操作し、どんな方法であれエルナンデスを勝利者として発表することに全力が注がれた。実際に不正行為があったという公然の圧倒的に明白な事実にもかかわらず、そのまま事を進めるように選挙裁判所を説得するためには、米国の圧力は欠かせなかった。

選挙裁判所が正式にエルナンデスを指名した後、トランプ政府は国際的な抗議を避けるために、米州機構に対する工作活動を始めた。というのは米州機構の選挙監視団の報告は、選挙の結果は信頼性がないと結論付けていたからである。アルマグロ事務総長に選挙結果をそのまま受け入れるように圧力をかけたのだ。そして、選挙監視団が時間をかけてまとめた報告はそのままゴミになった。

また、トランプ政権は選挙後の紛争の中でホンジュラス政府が行ったひどい人権侵害や殺人に関する報告を無視しようとした。エルナンデスの警察と軍隊が催涙ガスと実弾でデモの参加者を攻撃しているまさにその時に、米國務省は、ホンジュラス政府に対して人権保護の実績を称賛する報告を出した。

米国政府はホンジュラスで強い影響力を持っている。選挙での米国の役割を告発するため、ホンジュラス国民は米国南方軍が展開しているパルメロラの米空軍基地でデモを行った。ペンタゴンと國務省はクーデター以降ホンジュラスの警察と軍に広く関与してきた。そして、麻薬戦争と南方軍が進めている地域プロジェクト（繁栄のための同盟）を口実に、ホンジュラス治安部隊を訓練し装備させている。まさにその治安部隊が 30 人以上のデモ参加者を殺害したのである。国家警察と FUSINA で知られ

る国家機関治安部隊は米国から直接支援を受けており、現在では、抗議活動を弾圧するために重要な役割を果たしている。このような米国の企てを介してのクーデター以降のホンジュラスの軍事化は、まさにエリートたちの政策に反対する政治的、社会的勢力を抑圧するため作られた計画の実行にほかならない。

最後に、米国の配下の国々に対する外交的支配は、民主的権利のあからさまな侵害を国際社会が受け入れてしまう道を開いた。もし、米国とホンジュラスのエリートがコントロールできない唯一の要因がなかったら、この不正は秘密裡の取引としか見えなかっただろう。その要因とは「ホンジュラス国民」だ。夜 8 時から明け方 5 時までの夜間外出禁止令や銃殺命令にもかかわらず、何万人もの人々が通りに出ていた。人々はその後ゼネストに突入し、就任式に焦点を合わせて抗議行動を続けた。野党は選挙では分裂したが、民主主義を守るために力を結集した。

ホンジュラスをバナナ共和国として、あるいはトランプの言葉を借りれば、「くそ国家」として放置することは簡単である。ホンジュラスは、その不安定さ、弱体化した制度、法治の欠如、汚職、貧富の差、そして前例のないほどの暴力の蔓延によって特徴づけられている。米国はこれに関して重大な責任があるが、現在もホンジュラスと組んで大きな後退をしつつある。

米国の帝国主義政策にとって、ホンジュラスは地政学的に重要な位置にあり、長い間そうだった。それゆえ、トランプ政権の本分としてホンジュラスの民主主義勢力を破壊するということは予想できないことではない。しかし、私たちはただ今進行中の歴史的茶番を不可避なものとして捨て去り、自分たちの民主主義を守る義務を放棄することもできない。民主主義の原則を守るためには休んではいけない。米国政府が世界中であからさまに権威主義を推し進めている時にこそ、行動しなくてはならない。私たちが民主主義の理想を放棄する姿を若者に見せてはならない。米国でも、ホンジュラスでも。

(訳：大西裕子)

出典：Apoyo de EEUU al fraude en Honduras es una traición a la democracia,

<https://www.americas.org/es/apoyo-de-ee-uu-al-fraude-en-honduras-es-una-traicion-a-la-democracia/>

アレハンドロ・ホドロフスキーの記憶

私は年間、外国映画を数十本観る。それらの作品は、生涯足をつけることのない諸外国の土地に私をいざなってくれる。また幸運にも昔訪れることのできた土地の変化を教えてくれる。異国の人間と文化と旅情を味わい、かつ映画評を書くため観賞するのだが、試写会の案内状にすべて応えれば、年間最低 100 本は観なければならない。それは時間的に不可能だし、観たい映画がそれほどあるわけではないから、数十本に落ち着くことになる。去年も印象深い作品をいろいろ観た。その中で記憶に残ったチリ映画に触れたい。

昨秋公開されたアレハンドロ・ホドロフスキー (A J) 監督・脚本の 2016 年作品『エンドレス・ポエトリー』(終わりなき詩情)。私は何よりも A J との再会を楽しみにして、試写会場に行った。というのも 1960 年代末から 70 年代初めにかけてメキシコ市で、取材のため何度も会っていたからだ。A J は生国チリを 1953 年に離れパリに住んだ後、1967 年にメキシコ市に居を定め、映画監督や舞台演出家として活動していた。安っぽい勧善懲悪の活劇やメロドラマがチュルブスコ映画 (メキシコ映画) の主流だった時代に、道徳的常識を超えた奇想天外な A J の作風は上・中流階級に醜聞的反応を巻き起こしていた。映画・演劇界の余所者風雲児 A J は、各紙の文化面を連日のように賑わわせていた。

私も 1967 年にメキシコ市を拠点に記者活動を始めたのだが、同市にはやがて禅宗を広めるため高田慧穰という禅僧が日本からやって来た。私たちは友人になったが、あるとき A J は自作の舞台に高田師を登場させた。その初日、開演と同時に劇場は真っ暗になり、次の瞬間、舞台の幕の中央にスポットライトが当てられた。そこに浮かび上がったのが、僧衣姿

で目をつむり黙して坐禅を組む高田師だった。そのまま長い時間が過ぎた。メキシコ人の観客にはちんぷんかんぷんで、静寂はやがてざわめきが変わった。すると幕が開き、舞台が展開しはじめた。

あれは何だったのかと A J と高田師に訊くと、「人間のあるがままの姿を示した。それは普遍であるがゆえに無だ」というような答が返ってきた。2人はニヤニヤ、ニコニコ笑っていた。私には、奇をてらただけではないのかと思えてならなかった。それを口にすると、文字通り要領を得ない禅問答が展開されたのだった。私は A J も禅僧も、ジャーナリズムの立場で理解すべき対象ではないと結論づけた。

高田師は 1990 年代、日本への帰国を目前にして他界した。私はたまたまメキシコに取材出張し、帰国前日にメキシコ市内の自宅に高田師を訪ねたのだが、師は弱々しく、あまり笑わず多くを語らなかった。日本での再会を約束したのだが、帰国後すぐに私に届いたのは、師がメキシコを出発することなく急逝したとの凶報だった。悲しかった。

だが A J には四十数年ぶりに「終わりなき詩情」の画面で再会することができた。再びパリに住み、89 歳になろうとしている A J は「年老いた本人」として出演していた。あの 30 歳代後半の懐かしい風貌が白髪の中に確かに収まっていた。映画の筋は、生い立ちから出国するまでの自身の少年期と青年期を描いているが、心のおもむくままに空想で現実を編み直してゆく得意の「心理的魔術」(深層心理暴露) の手法を駆使している。最後には、グアダルペ・ポサーダ流の骸骨人間の群が登場する。国際的な大家になった精神的放蕩者 A J の発展した姿を私は見た。芸術家の自己陶醉のエネルギーは衰えを知らない。

(1) 砂漠の花

メキシコ先住民統治議会 (CIG) の女性広報官マリチュイらが10月から始めた全国キャラバンは、2月13日、南バハカリフォルニア州でのキャラバン隊自動車転覆 (死者1名、負傷10名) で突然に終わった。同時期、2018年大統領選の独立系候補としてマリチュイを登録するための署名活動も終了したが、署名は約26万で必要数の約86万に届かなかった。

2018年1月、グロリア・ムニョスの編集で『砂漠の花ー先住民統治議会の女性たち』が刊行された。独立メディア Desinformémonosのwebページで閲覧でき、2月末には本も出版されている。不毛な砂漠で咲く花のように、劣悪な環境や弾圧に挫けず活動を継続し、希望の花を咲かせているCIGの先住民女性10名のインタビュー、写真、ビデオ映像 (10分強) で構成されている。

砂漠の広がる北西部からは、国境部のバハカリフォルニア州の話者 250名とされているクマイ女性ルセロ、ソノラ州のマヨ女性のミルナとセリ女性のガブリエラが取り上げられている。西部ハリスコ州からはナワ女性マリチュイとチャパラ湖の非認定先住民コカ女性のロシオが取り上げられている。中央部からは、キャラバンでマリチュイ不在時の代行を担ったメキシコ市在住マサワ女性マグダレナ、テポストランのナワ女性で最高齢のオスベリア、オアハカ州地峡部風力発電反対運動の中心メンバーでサポテカ女性ベッティーナが紹介されている。

南東部のマヤ文化圏からは、チアパス州で起きたアクテアル虐殺事件の生き残りで市民組織ラス・アベール共同代表のツォツィル女性の

グアダルーペ、カンペンチエ州カンデラリアの人権活動家であるマヤ女性サラの2名が取り上げられている。

主要出典：

<https://floreseneldesierto.desinformemonos.org/>

**(2) ウラカン作戦、あらてのコンドル作戦？**

アルゼンチンとチリ政府による先住民族マプーチェに対する系統的な弾圧は、1970～80年代に両国の軍事独裁政権による「コンドル作戦」を想起させる。その様子を記録したTVアルジャジーラ制作のドキュメンタリーがある (https://www.youtube.com/watch?v=8zuiu_jprdDA)。骸骨の映像がドキュメンタリーの最初と最後に登場する。これは、19世紀の「砂漠の征服」で殺害され、ラプラタ市自然博物館の地下に眠っているマプーチェの千体以上の髑髏を暗示する。入植者に土地を奪われ続けたマプーチェに対する人種差別は両国では根深いものとなっている。

ドキュメンタリーでは、アルゼンチンにおける弾圧として、パタゴニアの最大の大地所有者ベネトン社所有の土地占拠闘争 (そんりさ160号) に参加していたホネス・ウアラに対する恣意的な長期迫害と拘束、運動の支援者だったマルドナドの失踪事件 (そんりさ162号) などが紹介されている。チリに関しては、木材伐採業者への直接行動を展開していたアラウコ・マレコ調整員会 (CAM) の広報官エクトル・リヤイトゥルら8名のマプーチェ指導者を逮捕するための「ウラカン作戦」が紹介されている。

2017年9月、チリの治安部隊カラビネロスによる電話盗聴により、木材運搬トラック焼き討ちの謀議を察知したとして、別の場所にいたマプーチェの抵抗運動の指導者8名が一斉検挙された。しかし、今年1月、テムーコ州検察庁の調査で、通話記録自体が特別作戦諜報部隊 (UIOE) の捏造だったことが判明した。

捏造の判明後、軍高官2名が辞任し、3月就任のピネラ大統領は、カラビネロスの組織刷新や反テロ活動法の改正を表明した。しかし、デモ、土地占拠、サボタージュ活動をテロ活動と敵視し続けるアルゼンチンのマクリ、チリのピネラという右派政権のもとでは、軍・警察当局による指導者たちの不当検挙、殺害が起きないという保証はない。

主要出典：<http://kaosenlared.net/nacion-mapuche-nueva-operacion-condor-ahora-contra-los-mapuches/>

(3) リオデジャネイロ女性市議の殺害

3月14日、黒人のエンパワーメント集会からの帰途、リオデジャネイロの女性市議マリエリ・フランコ（38才）は並走する自動車から銃撃を受け殺害された。市内のマレ・ファベラに居住する彼女は、ワールドカップやオリンピックを契機にした警察・軍部隊によるファベラでの過剰な人権侵害を告発し続け、進行する「刑罰国家化」に関する修士論文『ファベラを鎮圧警察ユニットにーリオデジャネイロ州治安政策の分析』（2014年）をフルミネンセ連邦大学に提出していた。20才の子供のいるシングルマザー、レスビアンで黒人の人権活動家の彼女は、2016年の市議会選挙で社会主義と自由党（PSOL）から立候補、第5位の得票数で当選していた。

2017年、リオ州で警官に殺害された人数は少なくとも1,124人とされ、米国全体の1,200人に匹敵する。2018年2月、リオ州の治安対策の権限は連邦政府の管轄となり、警察は連邦軍の指揮下におかれた。彼女はその活動を監視する市委員会の広報官に指名されていた。彼女は、3月10日、ツイッターで、「今週、2人の若者が殺害され穴に投げ込まれた。今日警察は住民を脅した。それはこれまでいつもあった。しかし警察の介入で事態は悪化した」と、アカリ・ファベラの住民の第41警察大隊に対する告発を拡散していた。

彼女の暗殺は、ミシェル・テメル政権が強要しているリオ市の軍事化に抵抗してきた活動家の「略式処刑」と言って間違いないだろう。

「麻薬王マルチーノと結婚、犯罪組織の擁護者、リオ最大の犯罪組織コマンド・ベルメジュ支援で当選」など、彼女の人格を貶めるフェイクニュースが執拗に流されているが、国際女性の日（3月8日）の市議会での彼女の演説（https://www.youtube.com/watch?time_continue=2&v=75-jBJnX5pQ）でも、リオ市警察の重武装化に対して厳しい批判を展開していることが確認できる。

主要出典：<https://www.facebook.com/ajplusespanol/videos/1832576190128055/>
<https://theintercept.com/2018/03/16/marielle-franco-assassination-brazil-police-brutality/>



(4) 悪魔のアボカド

近年の世界的ブームでアボカドの需要はこの15年間で30倍も増加し、キロ当たり売価も5ペソから70ペソに上昇している。緑の黄金（oro verde）と呼ばれるとおり、2016年度の輸出額は22億ドルに達し、トマトを抜いて、メキシコの農産物で一番の外貨獲得源となった。フランスの2チャンネルが制作したEnvoyé Spécialのドキュメンタリー『悪魔のアボカド』（https://www.youtube.com/watch?time_continue=211&v=lrpZS1zIrXA）は、緑の黄金の背後にある否定的側面を取り上げている。

一つは違法伐採による環境破壊である。ミチョアカン州では農地転用目的の森林伐採は違法だが、この5年間で17万haの松林が消失している。2016年には1.8万ha、2017年には1.3万haがアボカド農園になったという。アボカド農園のほぼ半分は違法アボカド農園と推定されている。摘発、植生の欠落による土壌流失防止や水資源確保のため植林も試みられているが、森林減少の勢いは留められない。

また、アボカド農園における農薬・殺虫剤の使用による健康被害も看過できない。メキシコ政府非認可の有機リン系殺虫剤が安価でアボカド栽培者に分配され続けている。薬剤の散布による胎児の成長不良・奇形、中絶、年少者の被害が多く報告されているが、関係機関は危険な殺虫剤の規制に消極的である。

ドキュメンタリーでは、ブームを契機としたナルコの介入、自衛のための農民の武装化の問題も取り上げられている。アボカド栽培農民の多くは、2011年頃から麻薬カルテルの「テンプル騎士団」から「ショバ代」を徴収されてきた。その相場は、1ha当たり50ドル、10キロ当たり1ドル、売り上げの50%とされ、カルテルは2013年には1.5億ドルを手にしたとされる。ナルコ支配からの自衛を名目に、一部ではアボカド栽培農民の武装が進展している。そのため、違法アボカド農園の摘発は進まず、地域の治安の改善はみられず、推計では、週1名のアボカド生産者が殺害されてい



るという。

主要出典
<https://breaking.com.mx/2017/11/los-aguacates-del-diablo/>

グアテマラで1982年にクーデターを起こした元将軍で、1983年まで軍事独裁政権で先住民族を弾圧したリオス・モント元大統領が4月1日、91歳で死亡しました。大量虐殺と人道に対する罪で2013年に禁固80年の有罪判決を受けながら再審手続きで収監されないまま。私も1993年に大学を休学して現地を巡った時にその名を知って以来、グアテマラ政府軍による人権侵害の象徴として刻まれていた人物でした。年月が経ったと感じる一方、「そんりさ」やレコムの仲間の話で接する以外はグアテマラそのものが遠くなっていたなど、我が身を振り返りました。レコム事務所がある京都を離れ、鳥取、滋賀で過ごした4年間はレコムの活動への参加も激減していました。が、今月から仕事で京都に戻りました。6月の総会はもちろん、「そんりさ」の発送作業などで、仲間と顔を合わせる機会も増えるでしょう。改めてよろしく願いいたします。(太田裕之)

次回「そんりさ」の印刷作業は東京で、2018年7月14日(土)

発送作業は関西で、2018年7月21日(土)の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 163 ニカラグア解放の神学 30年	Vol. 159 グアテマラのアフリカ系
Vol. 162 エルサルバドル 昔と今	Vol. 158 コロンビア・和平の陰の暴力
Vol. 161 コロンビア革命軍の最後	Vol. 157 ニカラグア・ワスパンの今
Vol. 160 サパティスタ・芸術と科学	Vol. 156 グアテマラ戦時下性暴力裁判

メーリングリスト

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会員 : 年 8,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆学生会員 : 年 5,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆賛助会員 : 年 10,000円(一口) …総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆購読会員 : 年 4,000円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町20-15
 太田方
 TEL : 075-862-2556
 お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは
 電話にメッセージをお願いします。

ホームページ : <http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail : recom@jca.apc.org

Facebook : <https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座 : 00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム口座 96万7420円

グアテマラ基金 95万7936円

(2018年4月現在)

そんりさ (SONRISA) 164号

2018年4月14日発行

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM)

定価 400円